

## パツシオネ 前篇(二)

伊作 走

### 二 海峡の彼方では

久岡はM化学工業に一九六二年に入社してから九年経っている、この間に同系列のM交易社へ六五年に転勤していた。転勤した翌年に清浦教授の水俣病の原因物質に関する学術講演を聴いている。教授が唱えたアミン毒説という学説はいまでは完全に否定されていて社会の片隅にもその残滓が存在しない状況になっている。その講演を聴きに行く途中で、幼友達で四歳下の大川みどりと偶然に会い、付近の喫茶店に入り、幼いころに馴染みあつた少年と少女に戻つた気分であつて別れている。こののちみどりは勤めに慣れて来ると、社会人の男たちと触れ合う機会が飛躍的に増えたために、久岡を深く付き合う対象とはあまり真面目に考えなくなつて行つた。久岡の方も九年の間にはみどりにかまう時間が取れないくらいに、仕事が忙しいのは当然だったが、軽い付き合いの女性の友人も幾人も出来ていて、結婚のことを何も考えないで仲良くな

ったり、疎遠になつたりしながら、楽しかったり、悩んだりしていつの間にか、三一歳になつている。

あの日突然、みどりに丸の内中通りで、背後から呼びかけられ、四年前に社会人になつた彼と、四ヶ月前に大学を卒業したばかりの娘の親しいもの同士の顔や姿をお互いに眺め、みどりは社会に出たばかりなのに、セクシャルな気配の漂う女になつたものだと感じ、笑い話のような会話をして、次に会うときは昼食を一緒にしようと言束し、そしてシャンソンも聴きに行こうと言つて、陽気に別れてから、早くも五年が経つていた。その五年間にはみどりの身の上には大きな負の変化が起きているという話は、母から詳しくはないが耳にしてきた。そのことで一度彼女に会つてどういふことが起きたのか、聞いてみなければならぬと思ひ、もし力になれることであれば、五年前の自分にはなかった、社会的な知識と世間的なずるさも勉強した現在だから、みどりのために何かをやつてあげられるかも知れないと考えていたが、なかなか実行出来ない日が過ぎていた。みどりが何か知らないが不幸な状態にあ

るらしいと母の言葉で知り、にわかに久岡はみどりへの恋慕の気持ち募りだしたのは、自分ながら戸惑うほどだった。

一九七二年の四月、プサン空港の一般待合室には、席が塞がるほどの乗客がいた。市内のレストランで遅い昼食を摂った一人旅の久岡は、その人たちに混じって木製の三人掛けベンチに腰掛けていた。手荷物は中型のカバンが一個だ。それは空港に着くとキャセイ航空空力ウンターに預けた。室内を飛び交う甲高い音感の久岡には何も分からない朝鮮語のお喋りの中にいながら、ふと心が揺れた。

大川みどりがどうかしたという母の言葉を思い出したのだ。みどりについては後悔ばかりの多い記憶に次々襲われた。みどりが社会に出てから、幾つものビルが整然と並ぶオフィス街の隣組のような近い距離に、お互いの職場があったにも係わらず、二人とも幼い頃からの特別な親近感を抱いていることに油断していたのが、みどりに悲しい経験をさせることになった原因のように思えたのだ。

空港の待合室で耳に入るこの地の人たちの言葉を久岡は一語も理解出来なかったが、その人たちは平穏な

表情でいるので、かれの気持ちも穏やかだった。顔だけを見ていると、日本人とは区別がつかないが、少々の利き方と物腰に荒い感じがしなくてもなかった。このように見えるのは、かれらは心にあるものを表現するに際して、思うことを言い切ってしまう、習俗社会に暮らしているからではないかと、久岡は興味を抱きながら眺めていた。

韓国の地で目にするこの国の人は、一九六一年にクーデターで張勉内閣を倒した、元日本陸軍少尉であった朴少将の軍市政権下にあっても、平和がつづく日本人とさして変りのない顔つきで、心中の翳りを持つ様子は見せていない。十四時二十分発東京行きの便の搭乗にはまだ十分ばかり時間があつた。耳に入る韓国語に慣れてくると、それに対する興味が薄れ、心の所在がなくなつていた。久岡は今回の三日間の業務出張中に、出会つた内容を眼を閉じてぼんやりと振り返つていた。ソウルに着いた夜、漆喰塗の丈の低い土塀に囲まれた中庭のある、平屋建ての朝鮮料理店に招かれて、催してくれたパーティーのキーセンたちの四人が、余りに若く、瑞々しく美しい容貌で、長い黒髪を後ろに束ね背中流し、彼の傍らに立膝で侍り、すこし前までの日本の娘のように含羞を含んだ所作で、銀の器

の料理を食べ易いように、金属の箸と匙を使って世話してくれる動作は、和やかで優しかった。彼女たちの誰もが日本語を理解しないらしいのが、日本人とどこも変わらない顔かたちで、吐く息がかかるばかりの近くにながら、その顔を見てると不思議に思ったのであった。この微笑を欠かさず、如何にも親切そうな身のこなし方には、久岡は年甲斐もなく胸を弾ませていた。もし二十代前半でこの席にいたら、間違いないで即座にキーセンの誰かに惚れてしまうことになったであろうと思った。往時、朝鮮民族が日本に渡来しはじめた当時において、彼らの文化程度の高いことと、女性たちの纏う色鮮やかな衣装と、洗練した美しい姿を、眼のあたりにした文化の遅れていた日本の男たちは、どれだけ彼女たちに渴望の念を持っただろうかと、久岡は遠い時代の、日本の青年たちが味合ったであろうところの届きたい情感に、束の間のことだが想像を馳せたのであった。

日本では久岡程度の間職の会社勤めの男にはどうして望めそうもない、艶札なキーセンたちの歓待にこの夜の酒は旨かった。宴の客は男ばかり四人、日本人は久岡が一人であった。韓国人の三人はキーセンとは

馴染みのようすで、際どい会話の、戯れの所為をしていられる。彼らの笑い崩れる態度と、娘たちが見せている応対での恥ずかしそうに、身をもむ動作がときどき顕われた。そちらでの言葉の遣り取りで、酒席に有りがちな男たちだけが喜ぶ、猥褻的な雰囲気は少々作られているらしいのが推察できた。男に一人が何か言うたびに、言葉の分らない久岡を除いて、宴席は笑い声で満たされていた。久岡はその場の光景に合わせ、てにやにやして見せていた。

この宴席には、男性が女性を翻弄していた東洋の昔の意識が色濃く流れている。娘たちも儒教の残滓の影響か、それを苦にしているふうがなかった。三人の韓国の男たちは若いころに来日して何年かの間、日本の高等教育を受けているため、日本語の会話は堪能であったから、時々、娘の名前とか性格を教えてくれた。だがその内容は他国人に言っても同胞の恥にならない程度であり、日本人の男同士が飲む席で女の噂をするのとは違い、軽く浅いものであった。

キーセンたちは日本の芸者とは違う。芸者なら訓練された声で唄い、正しく崩れない身ごなしで踊り、持参した楽器を姿勢よく構えて奏するのが、彼女たちはそれをしない。バーのホステスとも異なる肌合いで

ある、バーの女はこのように覆いものを敷いた板の間に履物を脱いで、坐りこむことはない。キーセンたちはさしづめ、艶めいて情感をそるコンパニオンというところであるうか。ときに彼女たちは客と二人で朝鮮の歌を合唱した、久岡は初めて耳にするメロディばかりであった。日本の演歌は韓国の巷の歌と同様だとは知っていたが、今夜はたまたま知っている歌が登場しなかった。それは酒席で唄う朝鮮の人だけが愉しむ、民謡のような歌とかエロチカルな唄ばかりであったためらしい。あくる日にソウルから長距離バスでプサンへ移動した車内では、うんざりするほど韓国の庶民が親しむ歌を聞かされることになった。バス内での歌はまるで日本の演歌そのものであったことが印象的であった。多忙であるはずの出張中に長い時間のかかるバスを利用したのは、今回のソウル行きはC・エンジ社への初対面の顔つなぎ程度の意味しかなく、技術業務に関しては、久岡が勤める会社とC・エンジ社の双方はまだ膝を突き合わせて語るまでに到っていないから、久岡がこの出張での任務は少なく、余裕の時間があつたためだ。それでもチョン社長は久岡の技術内容を探りたい態度を見せていた。

この夜の宴では外国にいるという屈託のない気分か

ら、いくぶん酔いがまわって来た久岡は、自分に少しばかりのハンブルが出来れば、傍らにいる美女を口説いてみたいぐらいに、気分は楽しく昂揚していた。かれに付いているキーセンは十八、九歳だった、いやそれよりも少し上だったかも知れないが。その夜の主客が久岡であることを知っており、キーセンの中では一番の美人だった。彼女は男心をよく知っている眼差しで、控え目に短く小さな声を吐息のように、時々出しては銀杯に酒を注いでくれた。久岡は彼女と会話がしたくなり、当たり障りなく日本語で「君の名前は何とどの？」と尋ねても、言葉が分らないと身振りで応えるだけだった。次に「英語はどう？」と英語で尋ねた。これにも何もわからないというジェスチュアをした。キーセンという職業でありながら、この程度の日本語が理解できないのか、中一程度の英語が解せないのかどうかは疑問だった。近くに同席している韓国の男らに聞かれては、少しばかりの日本語も知らない素振りをしたかも知れなかった。しかし彼女が、簡単な日本語さえも知らないのが事実なら、いままで日本人たちとの酒席の経験がなかったか、少なかったであろう。その意味ではこのキーセンたちは外国人、特に日本人慣れしていないくて、今夜の宴で

は同胞の男たちだけに向けた、ごく内輪の打ち解けた、韓国娘たちのありのままの姿を現していたのであったろう。娘はアルカイックスマイルの表情でしなやかに膳の菜を錫の箸にとつて、久岡の口許に運んでくれようとする。白く清潔なチョゴリのきつちりと引き締められている襟元から、膨らんでいる胸へとつづく白い肌が、ときに娘がうつむいて、皿のものを掬いとうろうとした際に覗いて見える。紫の絹のチマの裾はふんわりと娘の腰と下肢を包みこみ、その布の端はかれの胡坐の膝も覆うばかりに接近していた。この姿態も男の春情をそれとなく、くすぐる手管であつたらうか。韓国の男たちはキーセンに少しばかりとは言えないほどに戯れていた。それが宴席の常態なのかも知れない。

キーセンの胸元に覗く白い新鮮な肌を眼にした際に、彼の脳中に去来した思いは、五年前にパレスホテルの喫茶コーナーでみどりとコーヒーを飲みながら、夏物のブラウスのきちんと折り目の付いた襟元の浅く開いたところに、時々一瞬に現れた白い輝きは久岡がいままで意識して見たことのなかった、みどりの成熟した滑らかな胸の皮膚だった。みどりは変化していると思つた。彼女は急速に魅惑という不思議な力を身につけつつあるんだと理解したのだった。あれから五年経つ

ている。彼女は外形だけでなく、おそらく内心もどれだけ成長しているのか、想像がつかなかった。あのときはみどりの姿態、彼への接しかたに、若い久岡の女への一般的な願望の大部分が、満足させられる状態だと分つたのであつた。このときはファウストが少女ベアトリーチェに惚れる寸前の状態に似ていたかも知れない。みどりが彼の潜在意識に深く係わり始めた邂逅であつたのだつた。久岡の胸中にはみどりへの具体的なエモーションが起りはじめていた折に韓国に出張してきたのであつたからキーセンの肌の白さにも、彼の情緒は揺らぐのであつた。

宴の雰囲気は次第に盛り上がり、柔らかくなり、酒席は乱れて行きそうであつたが、或る線で均衡の感覚が働くらしく、まったくの無礼講の情景にはならなかつた。このすれすれとも言える倫理感覚は、かれらには儒雅の実践の長い伝統が、細くはなつたが今も地下水脈の形で、民族の素養として存在を保っているからだろう。

韓国の美少女を侍らせ解放された気分であつた。贅沢を言えばあと少しの時間があれば、娘との間に微かにでも情感の通ずる雰囲気醸成得たかも知れない点に、いくぶんのもの足りなさがあつたが、夜の宴会

は同席のC・エンジ社社員の言葉で急速に終った。そのときは午後十一時半であった。キーセンたちは何やら慌しく部屋を出て行った。

屋外へ出ると東京よりも緯度の高いソウルの四月の遅い夜の風は、かれの肌には冷たく感じたのは、宴席の床下にオンドルと同様な効果のあつた暖房が通つていたからであつたらしい。久岡の今回の案内役兼仕事上の打ち合わせ相手である李さんが他の二人と別れて、かれの傍らに付いていた。

「久岡さん、早くタクシーを掴まえないと、十二時の戒厳令の夜間外出禁止時刻になつてしまつて、憲兵に逮捕されますよ」

と言うのを聞き、久岡は驚き、困惑した。見通せる明かりの乏しい暗い道路にはまだ人々の姿が見えていた。誰もが小走りの状態で道を急いでいる。軍事政権下の韓国人はこれが日常のことだから、とり急いでいる様子でも慣れきつた対応に見えた。ソウル市内の地理がまったく分らない上に、夜だから何処に行けばタクシーが見つかるのか見当がつかなく、気持ちこそぞろになつて、久岡は李さんと一緒に広い道路に出て行った。

李さんはこんなことには慣れていゝらしく、道の中

ほどに立ち、手を大きく振つて要領よくタクシーを止めてくれた。このタクシーが東京のタクシーに比べると、ずいぶんと古くて内部がいたんでいるようで、走行中に突然ドアが開きはせぬかと用心して、後部座席の真ん中に坐つた。もの凄いスピードで走るのではらはらする。午後十二時までの時間内に最大限の稼ぎをしなければならぬからだろう。到着した目的のホテルの前でポケットから韓国通貨を適当に掴み出し、ろくに数えずに運転手に渡すと金額に余りがあつたらしく、無言のまま車はタイヤを乱暴に軋ませて走り去つた。タクシーの荒つぽい運転で肝を冷やし通してあつたから、宴会の愉しかつた気分は吹き飛んでいた。足早に入つたホテル内は意外にも静穏な雰囲気である、気がせいっていた久岡だけが場違いな場所にいるようであつた。カウンター内のホテルマンが特別の表情をしているわけでもないのを、不思議な気持ちで見、部屋のキーを受け取つた。エレベーターの中でようやく気持ち常態に戻り、先ほどまでの狼狽ぶりで、外国人である自分がどれだけこの国では浮いた存在であるかを身に沁みて理解した。この経験でなぜ宴会が十一時半に終わりにしたかが了解できた。

東京の通いつけの小さなバーであれば大部分の客が

帰った、十二時以降は窓とドア際の厚いカーテンを降ろし、灯火をしぼり暗く静かになった店内にごく親しい二、三人の客が残り、マダムとホステスも急に内輪の顔と小声になって、客と女たちの気持ちちが接近して行き、二時、三時まで腰を据える夜をたまに持っていた久岡は、戦時下のように厳しい軍政下の社会を経験することになったのだった。

久岡は待合室のベンチで二日間の出来事を、ちょうど思い返していたところだった。透明ガラスの大きい窓で仕切られている。隣の部屋がいきなり騒がしくなり、その方角から数多くのかかとの固い靴がコンクリートの床を踏む、秩序だった重い音、朝鮮語の命令らしき強い声、複数の固いものが一斉に床に当たる、高い音が響いて来た。ガラス越しに見ると、韓国軍の一個小隊ばかりが、隊列で入室して、携行の武器を床に降ろしてから、列を崩すところだった。隊長らしき兵隊の他は、皆二十歳ほどに思える完全武装の兵士たちである。携行した小銃は壁側に立て掛けてあった。身体を締めている帯革には旧日本軍よりも短い銃剣を吊り下げ、手榴弾を片側の胸に留めていた。兵士たちは驚くぐらい体格がよかった。よく鍛えられて、がたい

のいい兵士のみを選抜して、ここに連れて来たのではないだろうか。久岡はつい思ってしまった。小休止中であるらしく思いおもいに動き廻っている姿態と表情は、みるからに荒々しかった。かれらは東京のオフィスの同年輩の日本人とはまるで違う。帯甲をつけた男は、そのことにより命を遣り取りする闘争心が、湧き立つものであるらしいが、眼前にしている兵士たちが放っている、雰囲気は正しく軍事政権下の軍人の様相を示している。韓国では徴兵制であるから、二十歳ぐらゐの青年の心理は閉塞されているのだろうか、態度とか挙動に自然と角立った、ありさまが生まれるのかも知れない。一人ひとりの青年の元の素顔は、純朴で善い性格の持ち主であるはずだが、強権的な軍隊内で、同胞である朝鮮民主主義人民共和国への敵愾心涵養と、一九四七年代に成立した、北の社会主義国が、当時の韓国を凌駕する国力を持ち、強大化しつつあったために、それに対抗すべく最大の敵国（朝鮮戦争は休戦常態のままだから、敵と言っても誤りではない）と決めたの二十四時間体制の教育と人を殺すための集団訓練を、受けている過程で人格が変質していることだろう。韓国北辺の休戦ラインに展開して、北朝鮮軍と一触即発の殺気立った緊張のもとに、対峙していた小隊が、

何の理由あつてか突然半島南端のプサン空港に現れたのであろうか。

隣の部屋に兵士たちが入つてから、この待合室の人たちは、少し緊張した面持ちに變つていた。隣室の迷彩服、鉄のヘルメット、銃剣、手榴弾、日焼けした逞しい身体、きつい眼の光、命令があれば何時でも銃弾を発射するぞという、猛々しい気迫が感じられる若者たちの発散するムードが、その兵士たちにはこちら側に対してまったく関心がなくても、強い心理的圧迫感を生んでいた。

いま見ていることが、かれの日本での平和な暮らしが日常的に当たり前だとしていた心と、日本民族としての感受性を揺さぶり、自分の国が抱える問題を、真面目に考えさせられるきっかけになつていた。まだこの場では確実とは言い切れないが、自分が主体的な形で、祖国の社会に關与して行こう思う気持ちを、芽生えさせていた。

東京行きの便に乗り込んだ久岡は窓側の席に坐つた、香港籍の旅客機だから日本人は少なかったたので、日本語が耳に入らない。天候は良く眼下の日本海の海面で、細かく揺れつづく太陽の影を眺めているときだった。

宴会において平岡に付いた娘が、日本語をまったく

解しない素振りをした理由に、ふと思いが到つた。それは一九〇十年より四五年までの三六年間に亘る日本の植民地であつた過去の苦衷と、さらに加えて、五十年前の一九二三年の関東大震災時の混乱状況の中で生じた、千葉県習志野の陸軍兵営周辺での朝鮮人虐殺事件が起こつたことを、学生の頃友人の父親が社会学の専門家であつた縁で、耳に入つていた。その事件では無辜の在日朝鮮人六千人ぐらいがいろいろな手段の殺され方をされており、殺された人の氏名が分つているのは八十数人しかいないこと。その時愛媛県人の行商人の何人かが四国訛りの言葉が怪しまれ、巻き添えになつて殺されていた。殺戮に手を貸したのは民間の自警団であつた。軍と警察は救出のためには活潑に動かなかったという悲惨な過去がある。この事件はいまより五十年ほど前のことだから、この宴席にいる韓国人の中には血族の人がおらぬとも限らないのだと久岡は思った。朝鮮の人々の怨恨の念は、植民地化と虐殺に由来しており、彼らには決して忘れられない民族の癒すことの困難な傷なのだ。あの宴席においても日本人一般を疎外したい感情のひそかな現れが微妙に漂つていると感じていたのだった。そして同胞の娘が、植民者の流れである久岡に、馴れ親しむかも知れない状況



を阻みたい庶民レベルの意向が、ひそかに存在しており、同席の韓国男性は、娘が日本人への職務上の接待態度を越えることに、とても神経質な注意を払っていた結果であったかも知れないということである。

この例は当時十歳ぐらいだった、二十数年前に久岡自身も、同胞の少数の娘たちが占領者の米軍兵士に押れ親しむ光景を見て、青年たちの心を傷つけた社会現象を目の当たりにしていた。それとは国情と環境状況が異なるが、この本質は同根であるとは言えまいか。あのときに日本男性の胸中を覆った劣等感と、持つて行き場のない憤りは、キーセンパーティでの韓国男性がもしかすると抱いていたかも知れない心情と、遠くはない距離にあったはずだ。

臨戦感情の韓国兵士たちに心を揺さぶられた前日、国道際の町並みを見てみたいという理由で、長距離バスを選び庶民たちで、満席に近かった車内での、朝鮮演歌浸りの長い時間に包まれて、日本人と韓国人との庶民の哀調感情と小節の利かせかたの似ている唄の調子をしみじみと知った。三十一歳の久岡は兵役経験のないこともあって、この国の娘達から見れば、どこか知らずやさ男であり、この国の男たちよりも苦労知らず

の若く甘い感じがあった。そのためか車内の四人ほどの年頃の娘が、日常走行するバスには余り見かけない、身なりのよいエトランジェの男が珍しく、若い女性としての興味を抱いて前の席から振り返ったりしていた。

プサンの東にある石油化学会社で応対してくれた社員の、日本人に対抗しようとする気持ちを明らかに表す自負心一杯の態度、その会社を去るときに、渡された会社パンフレットと、なぜか一緒にくれた韓国旗の小旗と社旗の印象的であったことか。日本の国旗の白地と赤丸は象徴的に何を表すのかを知らない。昔は国民と皇室を表しているといわれたときがあったが、皇室の文様は菊花であるから、赤丸はこのことと外れている。これまで確とした解釈を聞いたことはない。しかし韓国旗にいろいろと描かれている図の意味するところを、帰国後に調べると、希望、太陽の光、明るさ、平和と純粹、正義、豊か、生命力、知恵、東西南北、春夏秋冬など実に沢山の観念が盛り込まれていることに驚き、韓国人の思考の底部には、かなり具体的にかつ羅列的に理想を追う民族性があるのだ、と知ったのであった。日本の会社では訪問者に日本国旗のミニチュアを贈るところはないだろうが、ここ韓国の会社では当たり前のようにして差し出されたのが、久岡にはいま

必死で立ち上がるうとしているこの国の人々を見詰める端緒になっていた。

久岡が訪れたC・エンジ社は本社をソウルに置き、プラントと呼ばれる大型装置の加工製造、建設設置の業務をやっている、米、仏二大エンジニアリング社とも深く協力し合っていて、現在の朴政権が国策としている方針に添う事業体であった。C・エンジ社の社長は、年齢は離れたが気の合う友人だった。チョン教授は、年齢は離れたが気の合う友人だった。チョン社長は技術部社員の南君を社長室で、プサン近辺の企業への案内役として紹介した。南君は社長が傍らにいらしたのでこちらになってお辞儀し握手を求めて来た。南青年は二年間の兵役を終えているから、人を殺傷する技術を学んでいる。歩兵種であれば自動小銃を撃ち、手榴弾を投げ、地雷を設置し、刺殺訓練を受けているわけだが、表情は到って純情にして真面目で控えめな青年であった。二日間案内してくれ、南青年と気持ちよく打ち解けてくると、喫茶店で休憩の折、両国の言葉の相違についての話になり、南君が日本語とハングル

との優劣比較論で見た韓国の若者の自国文化への確信に驚いた。南君は二年間、日本の大学への留学経験を持ち、上手な日本語で自らの意見を、久岡に向かって主張する内容は、彼が若いだけに卒業であった。約三十年前の一九四五年以前であれば、日本人に対しては言い得なかつた主張を、二十七歳の南青年が堂々と強く言い張ったところの、ハングルの日本語に対する優秀性について説く熱意は、朝鮮青年のナシヨナリズムそのものではなかつたか。久岡は青年の名前を日本語読みで言った、

「ナン君、そのハングルだけど、なぜ朝鮮の人たちは漢語をまったく捨てなければならなかつたの？」

「久岡さん、ぼくの名は（ナン）ではありません、（ナム）です」

「えっ、（ナン）ではなくて（ナム）なのか」

「あなたの発音の（ナム）ではありません、（ナム）です」

このかれが言う（ナム）は久岡の耳には何の変化もないように入るぐらいに微妙な発音差であった。

「もう一度、言って（ナム）って」

南君は幾度か発音してくれ、それを真似て久岡は発音したが、ついに南君が身につけている（ナム）とい

う正しい朝鮮の言葉を言うことが出来なかった。(ナム)がこの国の人のように正確に発音できないのは、エキゾチックでもあるわけだ、そのことは異国に来ている現状感があつて悪くない気分だ。

「ハングルってむつかしいね」

「ハングルは日本語よりも発音語数が多いから、日本人には微妙な点で困難でしょう。それだけ日本語よりもぼくらのハングルの方が人の心の襞の陰影まで広く深く表せ得るんです」

(ナム)というたった一言だけでも、この国の人のように発音出来ない自分が、つくづく外国に来ていんだと久岡は思った。耳から入るイントネーションの高低、強弱が表している、話手の細かい思い、感情なども異国人にあつては、相手の真意と微妙なずれを伴いながら聴いているのであるうか、これが書かれています。字句であれば、その意味は固まっています、誰もが、どの国のひとが読んでも意味は同じであるうから、誤って解釈したり、判断することは少ないのではないか。この国は五百年前に漢語を捨てていたのであるから、当然、漢語もその際を起点として、忘れ去られる結果になり、コリアの人々の文学的感受性と心情は大いに变化したであろうと推量できた。漢字を捨てるという

国策は当時の中国を刺戟したのではないだろうか。明帝国がこのことを根に持ち朝鮮半島へ侵略したとの話は知らない。もっとも朝鮮側は中国への朝貢を欠かすことなく、下手に出た外交をしていたらしいが。国中がハングル一色になり、あのロマンチックな情感に満ちている唐時代の詩も韓国社会では陰がうすくなっているかも知れない。コリアの文芸社会に疎い久岡のシンプルな思惟で、中国の優れた文芸精神がその時点で表向きは断ち切られているのではないかと思つた。そうなれば日本人が唐詩を、原語の中国字句とやまと言葉の送り仮名を混在させて読む感興と、コリアの人々が百パーセントの表音文字のハングル字句に転換させた唐詩のハングル詩化を詠んで感じる情感は、日本人と相違があつて当然だと思つた。その結果は今後どのようになつて行くのだろうか、他国の事情であるにも係わらず、彼は気にせざるを得なかつた。朝鮮半島の人たちは徐々に中国文学圏から遠ざかり、ついには彼らはどんな文学を打ち立てるのだろうか。久岡はベンチに坐りながら、唐突に李白と王維の七言絶句を思い出した。

李白 若非群玉山 顔見 会向瑤台下 逢

若し群玉山頭にて見るにあらざんば、  
かならずや瑤台月下にて逢わん

王維

惟有相思似春色 江南江北送君歸

ただ相思の春色に似たるあり、江南江北  
君が帰るを送る

この二篇の詩のなかの漢語、瑤台群玉山頭と春色、江南江北はやまと言葉にはなかつた字句ではなかるうか、これらの漢語をやまと言葉に転換しながら、日本語文体の詩趣を得るには相当な努力を往時は伴つただろう。これらの詩の解釈は、常づね中国との文化交流の中で養われた、やまと民族には新しい感性であつたろう。久岡が思惟しているものごとの八割以上は、漢語の助けを受けているといつても過言ではない。中国の言語文化は深い影響を日本人に与えており、中世以降日本人の血肉化している。ひるがえって考えると五百年前の朝鮮も同様だつたはずだ、朝鮮の人たちは漢語を社会の表側から隠してしまい、自らの心の外側に置いておこうとしているのではないか。

さらに、李白の五言絶句

拳頭望山月 低頭思故郷  
頭を挙げて山月を望み、頭を低くして故郷を思う

この中の漢語をやまと言葉に移すのはなんの苦労もない、ここで使われている漢語は、すべてやまと言葉にすでに存在したはずだからだ。だからこの短詩句の解釈と、それから得られる感取は、中国人も日本人もほぼ同様であろうと思われる。

戦国時代燕の刺客荊軻の詩

風蕭蕭として易水寒し。壮士一たび去つてまた還らず

この人口に広くかいしゃされていっている詩句を、心地よく味合うには、中国の文化を少しだけ理解して、そこそ成り立つ、漢Ⅱ中国文化を放擲すれば、これらの詩句が醸し出す心情も、その国から遅からず消滅するのではないか。などとぼんやり考えていた。

南君は(ナム)の発音を契機として言語面の民族的優越感を誇る様子だつた、三十五年間虐げられて来た

民族が国語論を媒介にして旧宗主国の末裔に対して巻き返している状況だった。言語論には門外漢であり、ハングルは何一つ知らないけど、両国の言葉の母音と子音の数から推測しても、日本人が日常生活で発音している音声で現す言葉では、カバ―しきれない音声があるだろうことは納得できる。久岡はこう考えた、簡単に言えばハングルは母音が十、子音が十四。日本語は母音が五、子音が九であるから、それらを組み合わせせて作られる単語数は。ハングルがはるかに多いゆえに、日本人の耳に慣れない、そして滑らかに発音出来ない言葉も生まれて来るのだろうと。このハングル言語に対しては舌のよく廻らない日本人を前にして南君は、いままでの人の良さとは別に、彼の属する民族の魂が文化的に何がしか優れているとの思いで嬉しかったかも知れないと感じた。しかし久岡は胸の中で反論を考えていた。(ナム)の発音が南君のように出来ないので当然のことなんだ。南君にしても日本語をネイティブジャパニーズのように、標準のイントネーションによる発音は出来ないはずだ、とくに濁音にはてこずるだろう。所詮、外国語は少年期までのその外国に住んでいなければ、もともと自然に身につかないのではないかと、久岡は思っている。(ナム)の発音が南

君の耳におかしく聞こえていても、このことは例えば英語においてRとLを構成因子としている単語の発音が、不得手なわが国民の属性を表しているだけのことと同様なんだ。ハングルも英語と同じく日本国育ちの人間には、不完全にしか喋ることは出来ないのだから、久岡は割り切り、自身の気持は何一つ傷付くことはなかった。こののちついに、南君はハングルが世界でもっとも優秀な言語だとも言い切った。これには久岡はいささか興ざめの感じを持った。彼は言い過ぎてゐる。何故そこまで言い切ることが出来たのか、彼の一世代前の大人たちが持っている、日本に対するインヘリオリティーコンプレックスが彼の代まで引き継がれて、胸底深くわだかまっていることに対する反動からなのだろうか。しかしなぜ南君はこんなに(ナム)の発音にこだわったのだろうか、少し念が入り過ぎてゐる。彼は妥協とか曖昧さを嫌い、何ごとも正確でなければ、気持が落ち着かない性格であるらしい。この国での公的な場で、往昔には使われていた漢語を捨ててしまい、十五世紀になつてから創られ、朝鮮半島で広く使用されて来たハングルには過去五百年の歴史があるに過ぎないのだ。対して日本語は七世紀の頃にはすでに国語としてやまと言葉と漢語の組み合わせで使

われていて、十く十三世紀の平安時代の頃に、大いに進化した日本語の歴史があり、日本民族が使う言語としての本質が、何故五百年間程度の歴史を持つに過ぎない、ハングルに対して劣るのか、肯定することが出来なかった。朝鮮における漢語の追放にしても、片や同じ中国からもたらされた思想である儒教、佛教などの形而上的文明を消滅させてはいない。それらの思想、宗教を国の指導者はしっかりと利用したままで現在に到っている。現に軍事政権の大統領パクチョンヒのチョンヒは漢字で表されることが多いのだが、チョンヒは漢語では（正しい光）という意味ではないか、つまり南君がハングル優秀説を称えても、苗字姓名では表意文字の漢語から、五百年経っても、すつきりとは袂を分かつことが出来ないのが実状である、と久岡は見ている。韓国のハングルナシヨナリズムは、民衆に存在する民族の主体性感情を満足させることによって、民族の一体化エモーションを、昂揚させる手段であったのであろう。もしもこのときに中国から到来した思想だという理由で、儒、佛の二大思想をも打ち捨てておれば、それにとつて代わる透徹した倫理のある方向を示すことなく、広汎性のない地域ごとの素朴で呪詛性の大きい民族宗教しか有していなかった、韓民族文化

は少なからず後退化したのではないだろうか。漢語を捨てるという決断でもって、ことごとくにわずらわしく感じていただろうところの、隣の大国である中国語圏から離脱することで、韓民族間で一様にナシヨナリズムが盛り上がり、それが五百年後の現在までつづいているのだ。ナシヨナリズムの高揚期には先ず青年の心情を捉え燃え上がらせるのが常道であるのだが、一九四八年の韓国独立の熱波が、二十四年間経つたいまでも、国の隅々まで深く敷衍しつづけている国情の姿を、南君のかなり偏向した言語論で目の当たりに接し、肌身で知ったのであった。久岡は後年、社業での外国赴任先の言葉をかかなり容易に喋れるようになっていたのは、このときの韓国での経験で、外国語を相対的に見る思考の基礎が出来たせいかも知れない。

ハングルはすぐ隣の国の国語だから少しぐらひは理解できるようなのが、国際的な付き合ひというものだろうが、ハングルの字が余りに普遍性がないように思われて、その努力をしようとする人は、南北朝鮮に何らかの関係がある人たちに限定されるのではないだろうか。これは日本語も同様であろうが。ある外国の言葉を分ろうとする意欲は、その国の文化、風光、経済、学術、科学、技術、政治、スポーツ、人情に秀

でたところがあつてこそ起きるのであろう。一九七二年の南北朝鮮にそれがあるだろうか。

朝鮮民族のことを考えていると、関連してベトナムの状況を彼は連想した。ベトナムも一九四十年ごろに漢語とはほとんど縁を断ち切つたと本で読んだことがある。このことは朝鮮に遅れること五百年である。近來のベトナム人の口語（クオック・グ）をアルファベット表記にしている。古い昔に千二百年間中国の統治下にあつたベトナムは、現在中国との政治的、言語的つながりを絶つてしまつてゐる。そして一九四五年以來、初めはフランス相手に独立闘争を始め、次に相手は米國にvari一九七二年の現在まで、その間、二、三年の休止期間があつたが、延々と三十年間近い独立戦争をつづけて倦むことのないベトナム人たちの内面には、どれだけ激しい民族意識が燃え立つてゐることであらうかと想像した。

石油化学会社からプサンに引き返すと、南君は直ぐに往路と同じ鉄道でソウルへ帰つて行つた。南君と別れたあと気が付いてみれば、彼とは二日間という短い社業上の付き合いだつたせいとか、親しい友情は生まれなかつた。日本人と韓国人との間には、過去の両民族

上の不幸な経緯があつて、おいそれとは友情が発生し得ないというのが、一九七二年における両民族間の社会的状況であつたのかと久岡は感じた。

久岡は市内の比較的新しいホテルに宿を取つた、プサンは海産物が豊富だと聞いていたから、魚料理を頭に描きながら、夕食を摂りに街に出た。浅草のようなまた大阪の新世界界隈のような雑駁な街だ。北九州が近いから日本人はよく来るらしい、小さな魚料理店に入ると料理人は一目で久岡が日本人と分かつたらしく、慣れてはいるが発音のぎこちない日本語で、

「いらつしやい、何にしますか」

「さしみがいいな」

「さかなは何にしますか」

「そうだな、いま、一番旨いものを頼むよ」

出て来た刺身は鯛と鮪であつたが、荒っぽい包丁の捌きかたで、刺身の一切れひときれが、日本とは違つて大きく、量も多すぎて並べ方にも美意識が少しも見えず、まるで焼肉屋の皿の焼肉材料のようである。これでは刺身を食べる雰囲気にはほど遠かつた。新鮮な魚さえ食べればいいからと、安っぽい店に入つてしまつたと後悔しながら、なんでもいいから、さつさと腹

に収めるとそうそうにホテルに帰った。ベッドに横たわりながら、今日一日を振り返り、またこの国のことを思った。朝鮮民族は日本の植民地として二十世紀前半の過去三十五年間の沈黙のなかで、民族の魂の潮流を形成していた独立への目標の達成感があってこそ、南君は久岡と劣等意識なしで話し合えたのである。彼のおとなしい態度の中にも満たされた心が顔つきに出ているのであった。

久岡は日本にもっとも近い国のダイナミックなナシヨナリズムの飛沫を浴びた。対馬海峡の西水道と東水道という狭い海域を挟む、日本民族と朝鮮民族との長い歴史間に出来上がっている、互いに深い陰影をまといながらも、付き合っていかなければと実感しつつあった。旅客機の窓の下には蒼い海原が去って、本州の山地をはるか下に見ながら機は東進していた。凸凹の激しい大地には萌える緑がつづいていた。やがて工場の煤煙がうすく東京湾の上空を流れている湾上を一瞬に過ぎ、房総半島の上空に出た、人工的に整備されて自然美を失くした半島は箱庭のように見える。点在するいくつものゴルフ場に荒らされて、傷ましい景色を曝しているのを嘆きながら見下ろしていると、機はい

つのまにか羽田の滑走路に、小さなバウンドをして到着した。外の四月の生温かい風と、東京の限りなくつづく灰黒色の屋根と小さな家並みと、忙しく厳しく表情のない身なりのよい人たちが迎えている光景に接したのだが、久岡には迎える人はいなかった。

旅客機を降りてから、彼は南君に質問が一つあったのを忘れていたのに気がついた。それは朝鮮戦争末の停戦交渉に北朝鮮軍代表として、その頃の新聞に連日写真が載った、ハンサムな南日將軍と彼が同姓であることから、朝鮮で数少ない苗字なので、何か関係があるのではないかと興味を抱いてことであつた。

羽田からモノレールで浜松町駅に行く間に、ふたたびソウルのC・エンジ社のことを思い出していた、社長室から十メートルほど離れた場所に社長室よりも広い感じの顧問室があつて、南君がそこに案内した。部屋には五十歳代の男の米人が一人大きな机に向かって坐っていた。その部屋の主に、久岡はどうしても挨拶しておいてくれとチョン社長から要請されていた。久岡は米人がいきなりべらべらと米語で喋りだすのではないかと、警戒して気が進まなかったがノックして入った、米人は広げていた新聞のようなものを気軽に置



くと、紳士的な態度で握手して、久岡には意味のない微笑をして見せただけだった。米人は久岡が日本人であり、英会話が苦手な国民であることを知っていたのではなかっただろうか。久岡はあっけなく退出した。彼は廊下をチョン氏の部屋に戻りながら、米人が何故、好待遇で顧問としているのだろうかと考えた。あの顧問は何をしているのだろうか、米人を企業の中核に置いておかなければ、企業活動ができないのであろうか。アメリカの主導権がなければ事業が出来ないシステムを必要としている韓国の現状があるのだ。それにしても、朝鮮戦争休戦後二十年が経っているのに。これがいまのこの国の状況なのだと思は結論したのである。

社長室へ戻る途中にある役員室で、ソン副社長にも挨拶をしておいてくれという、チョン社長の要請があったのでドアを開けた。内部にはいかにも役員待遇に相応した、大型の机と坐り心地のよさそうな椅子四、五脚が置かれていた。その時在室していたのは女性のソン副社長だけであった。彼女は五十歳半ばに見えた、小綺麗な服装、しゃれたヨーロッパ製腕時計をして久岡を微笑をもって迎えたが、ちっとも優しくそうには見えなかった。中背、丸顔の女史はどこか威厳のような

空気を漂わしていた。久岡はエンジニアリング会社に中年の女性が高位の役員としてるのが解せなかった。だが彼女は日本語が達者であった。どうもチョン社長よりも、この会社では権力を有しているような態度であるのは、彼女は朴軍事政権に繋がる人物であったのかも知れないと、久岡は気づいたことであった。久岡が訪問第一目の挨拶をすると、彼女は日本語を話すのが、嬉しいような素振りであった。とくに日本人の若い男に対しては、自分が日本語に堪能なところを見せたかったかも知れない。ソン女史はすぐに、何のわけかまりもない表情になって口を開いた。エンジニアリング事業には知識が浅かったためか、業界や技術の話よりも、日本人作家についての話題を振って来た。

彼は困ったことだと思った。技術書以外の日本語文での人文科学分野での読書量での比較では、彼にはソン女史がどんな程度かは分らないが、たぶん長く日本に滞在して、文科系の高等教育を受けているような彼女には、太刀打ち出来ないだろうと自覚していたからだ。そしてソン女史の喋ることを一方的に聞く側に廻っていた。彼女の話の中では、司馬遼太郎に高い評価を与えていて、「司馬はいいね」と、褒め言葉を言った。彼は実のところ司馬が大嫌いだった。司馬の書いたなに

かを読んでから、自分とは肌が合わないと感じたのである。久岡は思わず、

「あの人は真の作家とは言えませんよ、国士ぶってる作家に過ぎないんです、いわゆる文学ではありません」

と言いつうになつたぐらいいだ。では誰がいいのかと反問されると、自分の好きな色々な作家の名前を言つて、その作家の名前を知らなかつたソク女史の気持ちを傷つけはしないかとの思いと、異邦人に説明することの煩わしさを考えていた。ソク女史がいくら日本語を熟知しているといつても、日本人の小説の微妙な味わいと感覚は、所詮外国人であるソク女史に話しても理解されないだろうし。その頃の久岡は、石川淳や吉行淳之介の書いたものをよく読んでいたから、こちらが石川や吉行などと言つてもまったく話が合わなくて、この場が気まずくなると思ひ黙つていた。何故ソク女史は司馬なんだろうかと考えると、司馬の有名な「坂の上の雲」が女史の心にインパクトを与えたのではと気がついた。約百年前、西欧の諸外国と比較して政治的に、経済的に、軍事的に劣る国の日本国民が、一致団結して国力を伸ばそうと努力する姿を描いた内容が、かつての植民地であつた韓国国民には、大層に強い影響と説得力のある小説であるかも知れなかつたのだ。ソ

ク女史は朝鮮民族主義の立場から他山の石として読み、司馬に感化されたのであろう。久岡は渡韓第一日目にしてソク女史との会話で、かの国びとのナシヨナリズムに触れたのであつた。このとき久岡は心の中で自分かつてな理由を作り、広い文学ジャンルを恣意的に狭くして、ソク女史を閉めだすという偏つたことをなしたことは、ひいてはその後の社会活動において、この傾向を強めることになつて行つたのであつた。

朝鮮戦争で韓国の救援者であつたアメリカ軍は韓国軍よりも権威ある存在として駐留している。久岡は祖国日本ではどうだろうかと日本国内の随所にある米軍基地の敷を思うようになった。戦争が一応戦火を収めた形になつたのであるから、アメリカ軍は韓国から撤退すべきが当然だと思つた。片や北朝鮮軍の援助に入つた彭徳懐將軍指揮下の中国義勇軍は北朝鮮の地からすべて撤退している、いま残っているのは板門店の休戦交渉の場だけに中国軍將校が何人かいるだけではないのだが、若い久岡はまったく左翼思想の持ち主ではないのだが、この状態を考えると何だか頭を抑えられように鬱屈した気分になつた。

浜松町駅では山手線内回りの混み合つた車両に押し込むようにして乗り込んだ。モノレール車内のどこか

のんびりした、旅のつづきのような人々の雰囲気はここで消失した、山手線車内は一変してドライな表情をした人たちが互いを疎外した姿で乗っており、誰もが忙しげであり、気持ちに少しの余裕も持ち合っていない、日常の顔が乗客の誰にも貼りついていった。久岡の表情も周囲の環境と合うきびしい口許と目つきになっていた。

久岡は自社が入っているビルの表に来た時に、何故か朝鮮にかかわる記憶が、無色だったはずの胸中にまた浮かびあがって来た。これも三日間の韓国行きがきっかけになっていたのであるうか。彼が小学校の折に同級生にリコウという朝鮮人の少年がいた。リコウは四年生のときに転校して来た、背の丈はクラスでは中間であった、貧しい服装に、無口、右耳の後ろ側頭部に傷の痕があつて、毛が生えてなく、三センチほどの細い禿になつている箇所があつた。もちろんリコウは傷跡が出来た原因については何も語らない。だがクラスではさっそく陰でハゲという渾名で級友間では呼ばれるようになった。普段はまるで素っ気のない少年に見えた。彼は卒業するまでに、周囲の環境の効果で、充分に朝鮮ナシヨナリズムに凝り固まった少年に育つたのではないだろうか。近くに朝鮮人学校はなく、行

くにしても遠くてかなりの交通費がかかるためかも知れないが、通常の日本人ばかりがいる小学校に通っていたのだ。リコウの住居は細い路地のような横道にあるスラムの中にあつた。久岡は同級の誰かに、リコウの家の場所を教わっていたこともあり、その近所にリコウがどんなところに住んでいるのだろうかと興味を持ち付近まで行ってみた。その場所は本当に貧しい家々が長屋になつていた。リコウの家は道の曲がり角から五軒目、軽自動車がやつと通れる狭い道に面していた。向かい側は広い葱畑であつた。狭い間口の表は開け放つてあり、炊事道具が外にまで置かれている、リコウの家の前を何か悪いことをしているような気分になり、彼の家をちらつと見ただけで、足早に通り返したのだ。だから家の中にリコウを含め家族が居たのかどうかはわからなかつた。

リコウの成績は久岡と同じぐらいだったらしく、久岡は先生からリコウに負けないように、勉強に励めと声を掛けられていた。先生は久岡の学業成績がリコウに劣るのを喜んでいなかったようだった。このとき先生は日本人に肩入れしたいんだと感じたものだ。リコウは同級生に同胞がいなかったせいも、いつも孤独だった。誰にも挨拶しないし、話し掛けようともしな

った。彼が同級生から乖離しようとする、意思と粘り強い実行力はいつかどこかで爆発するのではないかという推量を久岡に持たせた。クラスの大乱暴者連中もリコウにはちよっかいや意地悪をしなかった。リコウには何かとは分らないが、彼は目立たなくしている気配でいるのに、少年らしくない怖いような雰囲気、身体の周りにあったためだろう。久岡はそのようなリコウが気にかかってしようがなかったから、リコウの家の傍まで一人で行くような行動をしたのかも知れなかった。リコウの貧しく、汚い家を見たときには、リコウが可哀そうに思えたのだ。ちょうど朝鮮戦争が小学校上級生の頃にあつて、在日朝鮮人のほとんどは、北朝鮮系の朝鮮総連と関係があると思われていたのであつた。朝鮮戦争の後に、北朝鮮に還る大運動が行われていたのだが、リコウの一家は戦時中から住んでいる場所から離れなかったようだ。小学校卒業時に久岡は優等生になったが、リコウはなっていなかった。久岡は自分が優等生になるなら当然リコウもなっているものと思つていたから、この結果は不思議だった。中学を久岡は私立の中高一貫校に進んだので居住地域の少年たちとは、接触がなくなったためにその後のリコウについては知らない。リコウの身体は他国に生きなが

ら、魂は祖国再建興隆を願うナシヨナリステイックな夢を描いていたのではないだろうか。もしかするとリコウは中学を卒業すると、直ぐに働きに出て、その頃に力をつけていた、朝鮮総連のぱりぱりの左翼中堅活動家になる道を歩んでいるかも知れない。だとすると彼の一家が北朝鮮に帰還しなかった理由はあつたのだ。このように空想的に、朝鮮民族と日本人社会との関係を思いながら、リコウ少年のその後がどうなつたかを知りたくなつていたのであつた。

久岡はコリアの地で、多くの人々に会うたびに、自分の背後の南北に細い日本列島に平和に暮らしている、人たちが気になつた。特別の思想を抱く人以外には、ことさらにナシヨナリズムを顕示したりしない、一見穏やかで、無気力にさえ見えてしまふ、日本の庶民が切なく、いとしく思えてくるのだつた。

丸の内のM交易のオフィスに顔を出すために、静かなエレベーターの中に佇み、自分の内部の深いところで自覚しない潜在した意識が流れており、それがところどころで表側の意識に顔を出して、リコウのことをなぞを思い出しているんだと感じていたのであつた。

つづく